

二面の鏡



田淵安一

二 面 の 鏡

田 淵 安 一

double
miroir

tabuchi



筑摩書房

二面の鏡

一九八二年六月十日 初版第一刷発行

著 者 田 淵 安 一

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九四一六七一一（編集）

二九一七六五一（営業）

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京六一四二二三

厚徳社印刷・和田製本

©田淵安一・一九八二

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。

二面の鏡
目次

二面の鏡

相之浦 ヴォウアラン村 運不運 枯野の夢
 パスポート マルセイユへ 伊エ門 ゲイル
 ませた子 カッチャ 誘拐 地獄絵 三人組
 表現の自由 狂言自殺 毛穴の風 母の夢 ひ
 とりっ子 親の情事 性の自由 性教育 春画
 貸家さがし 悪家主 東海岸 クレメンテ
 葬式 猫の死 ぬかみそ煮 ウナギ 昔の味
 色食道 宿の飯 食通 もてなし 自然の味
 糞だめ 公衆便所 絹の香 肉臭 夜の音
 夜の壁 いまはの眼 初個展 視る人 怠け哲
 学 売り込み 画商 フジタの死 歴史

Ⅱ

美術通信（一九七八～八二）

北の旅

Ⅲ

ヴォウアラン村にて

春窓好日

村騒動始末記

とおい樹影

血縁・地縁

ヴォウアラン村散想

あとがき

176 109

245 240 212 206 200 191

著者自装

二 面 の 鏡

相之浦

えらいところに来たな、相之浦海兵団の対岸にちがつく街の灯をにらみながら、心のなかでつぶやいた。入団して数日というのに、その灯はもういかにも遠い。消灯まえに許された数分の喫煙時間、着なれぬ水兵服のひろい襟や袖を冬の風が容赦なく吹きぬける。ゆとりのない気持ちそのままに、いそがしく点滅する煙草の火にまじって、じっと澄んだ対岸の灯を見ていると、一瞬の静けさまでもどる。

昭和十八年の初夏、高校の卒業がとっせん半年くり上げられた。僕は京都の三高の生徒だったが、このことを告げる伊吹武彦主任教授は蒼白で、ふだんフランス語を教えるときの澄んだ声とはうって変わって低くふるえていた。教室の壁が崩れ落ちて、戦場が間近に迫るのが感じられた。夏休みの終わりを待たず、いくたりかの友は海軍に志願したという噂もはいった。

僕といっしょに東大に来た同級生には親しい間柄が多かったから、われわれは講義のためというよりは、友の顔見たさに大学に集まった。会えば喫茶店にゆき、他愛のないおしゃべりに午後をすごすのだが、とにかくこの友だけが残された自由だった。ランボオの詩を朗読するものもいれば、ヴァレリイに夢中なものもいた。だが会話のなかに、親鸞の名がしだいに多く出るようになった。

へ念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり」

手許の古ぼけた歎異抄を出してみると、方々に傍線が引いてある。三十年まえフランスに発つときに友がはなむけとしてくれた文庫本だが、それは友が戦地で書きこんだものだろう。念仏ということばは、刹那刹那の生きざまと換えてもよかった。われわれは入隊までの、かけがえのない数カ月の自由を寸秒を惜しんで生きねばならなかった。死の心構えができようができまいが、まず生きることだった。

その友もちりぢりになり、対岸の灯のかなた遠くにへだてられた。そして、ちがった土地の灯をおなじ想いで見ているかもしれない。そのうちに、外地に送られる者もでるだろう。そのいくたりかは帰ることもあるまい。そんな想いは、闇を裂く鋭い号笛の音にたちまち破られて、吊り床おろしのしごきが待っていた。

せつかく生きのびたのだから好きなことをと、戦争がすむと画家になる気持ちがかたまつた。それから三十数年、いろいろな土地、さまざまな季節の灯が僕のまえに現われ、消えた。へ一生のうちにはとんでもない土地の灯を見るものだ」

相之浦海兵団でのこんな感慨は、序の口でしかなかったのだ。

ヴォウアラン村

書齋の窓とむかいあった丘の上に、雑木林の梢をとおして、農家の灯が見える。この窓は僧院の窓のようにせまい上に、夏のあいだは前の斜面に果樹が茂っているから、頭を下げて透かしてみても、丘の上の空は見えない。だから、冬になって梢がすけ、丘の稜線にとおい灯が見えるようになると、またひとめぐりしたという、年の想いがひときわ深い。

へ一生のうちには、とんでもない土地の灯をみるものだ

相之浦海兵団でのごうした感慨はやがて四十年の昔になり、パリ南郊のここヴォウアラン村に住んで、もう二十年をこす。

パリから十六キロメートルそこそこしか離れていない村だが、風致地区になっているから、裏山から見下ろすと、中世いらいの面影がまだ消え残っている。裏山にむかいあうように高くそびえている鐘楼は十三世紀のままだし、六世紀という古さの地下祭室をもつ教会は、依然として村の中心だ。

右手のこんもりした森にかくれた修道院は、グレゴリアン聖歌の合唱隊で名高い。

といっても、二十年のあいだにはわが家に変化があったように、村も気づかぬうちに変わっている。

全学年をあわせて三学級しかない村の小学校をでて、パリまで中学に通った長男は、いま兵役だ。双生児の次男と長女が小学校に入ったときは、各学年はもう二クラスにふくれ上がっていたし、この村で生まれた三男は、ちかくにできた高校に通っている。若夫婦でやっていた建築資材屋のおやじは、白髪まじりになって高級車を乗りまわし、隣村の広場にはふたつも銀行の支店ができた。有名なポリテクニクはじめ、大学、研究所が周辺に移ってきて、このあたりは頭脳の集中度がフランスといわれる地区になった。それほど発展振りだ。

二十三年の同棲生活にきりをつけ、われわれが結婚式をしたのもこの村の役場だった。羊を丸焼きにしたガーデン・パーティには、村長はじめ二十年來の友人が二百人も集まって祝ってくれた。この日ばかりは、ロックを率いる次男が村中にひびく自作を流した。彼の曲を歌うのはコルシカの旧家の娘だ。地質学をやっている長男の婚約者は、装飾を勉強する美術学生。心理学専攻の長女の相手は社会学の学生。オートバイ狂の三男は、大秀才のとてもかわいい娘と仲よしだ。

皆が集まると十人のテーブルになるが、正面にひとりだけ肘かけ椅子に座っているのが妻である。子供たちの絶対の愛情をあつめているのだから、僕は彼女の左で辛抱するより他はない。

よそ目には春風そよぐ食事のさ中に、ふと、相之浦のあのとおい冬の灯が臉をかすめたのは、食前のウイスキーが一杯すぎたためであろうか。

運不運

へえらい所にきたものだ」といった戦争中の感慨は、じっさいには平時でもかわるはずがない。といっても、こつこつ働いて家を建て、老後のための利殖を計るといった計画がそのとおりにいく時代なら、ひとりの人間が生きる場所にはおのずと限度がある。僕がそんな計画をたてていた訳ではないが、相之浦とか鹿屋なぞという地名が、僕の考える未来の地図にのっていなかったのは当然だ。

へえらい所にきた」という感慨は、だから、運命の顔をのぞいた想いだ。僕はどうやらそれ以来、成り行きまかせ、どこにでも住める人間になったようだ。運命論者というのではない。下手にあげないだけの話である。

戦争にも個人の小さな意志がとおる部分がある。要領がきく部分だが、その要領が逆目にでると命取りにもなる。運命の領分という他はない。

乱視が理由で操縦科予備学生を免れたのは、まあ予定通りだった。フランスの画家にならって迷彩を志願し、航空写真判読にまわったのも半分思いがかなった方だ。硫黄島作戦のころ、木更津から飛び立ってサイパンのB 29基地を撮る計画がでて、そのお鉢が僕にまわってきそうになったことがある。

片道のガソリンでサイパン上空を飛び、その先に残っていた日本軍の基地に着陸すれば、潜水艦で迎えにいつてやるという話だった。サイパンを撮ったところで爆撃できる訳ではないし、硫黄島で手いっぱいなときにむだではないか、僕の意見具申のせいではないが、中止になって生命びろいをした。これはいくらか要領の部分に入る。

その反対に、僕の願いが容れられなかったばかりに助かったこともある。運命の領分だ。

宮崎に配属され、フィリッピン行きがきまっていた。教育中に親しかった男も隣りの飛行隊で、おなじフィリッピンのクラークフィールド基地に行くことになり、司令におなじ日に出発することを願いにいつて叱られた。へ学校の遠足じゃあない。おまえは残って残務整理をすませろゝというのだ。この一週間の差がけつきよく、ふたりの生死を分けた。戦後、大学にもどって、彼の白骨を見た友人に会っている。クラークフィールドを守るため、武器をもたぬ隊員は爆弾を抱いて自爆した。それができず密林に逃げた者も、死は逃れられなかったのだ。

この話には続きがある。僕のアメリカの画商が、クラークフィールド攻撃隊長のひとりだったのだ。へもし俺が願いどおり出発していたら、おまえの手にかかって死んでいたかもしれない。そうすれば、俺の絵でかせぐこともできなかった訳だゝ

こう笑いながらふたりは乾杯した。

枯野の夢

へ君はフランス語を第一志望にしているが、どういう訳ですか、三高の口頭試問で伊吹武彦教授にこう訊かれた。当時は英語を第一外語にする文科甲類から成績順に採ったから、丙類のフランス語を第一志望にする奴はすこし怪しまれた。将来フランスに行つて画家になるつもりですから、と答えたらしい。じぶんではよく覚えていないが、若氣のはつたりだ。

油絵は中学三年のころからかなり夢中になつていて、四年のときには二科展に応募して落選した。絵具屋のおやじは裏がえしにして審査の印しをしらべ、へおまえ、最終予選までいっとる。たいしたもんや」と慰めてくれた。

中学生でなくても、二科に入選すれば新聞にのつた時代だから、まんざらではない。僕はそこそこ須田国太郎に心酔していて、須田さんが三高出身なのが、美術学校のかわりに三高を選んだ理由だった。だが、ほんとうをいうと、ある大金持ちのお嬢さんに胸を焦がして一念発起したのである。

それはともかく、なにか目標をたて、一心に勉強したのはこの時ぐらいなものだ。なるほど口頭試問で答えたとおり、フランスに住むことも、絵描きになることも、そのとおりになった。他人の眼に

は、いかにも計画的にみえるが、僕はそれほど綿密に事をすすめる男ではない。

運命の女神は正面から髪をつかまねばいけないというが、大金持ちのお嬢さんも、フランス行きも、女神の髪どころか藁ほどの夢にちかかった。といつても、藁だ藁だといっているうちにじつは本物の髪だった、そういうことも起こるものだ。子供のとき大病をして、死ぬ死ぬとくり返しているうちに助かったのが最初の経験だが、どうもそれくらい運命の髪をつかむ代わりに、こっちで駄目といつておいて、むこう様の気分が変わるのを待つようになったらしい。

海軍にいた時、私室でひとりになって酒を飲んでいると、角砂糖が水に溶けるイメージが浮かんできた。いま手にある固い角砂糖が、次の刹那には水に消えてなにも残らぬ。つい先ほど防空壕の前でへ私は珊瑚海でもミッドウェイでも生きのこった。弾が当たらんのです〜といっていた下士官が、味方の高射砲弾の破片で死ぬ。僕は、僕をとりまく戦争という大きな出来事のなかに生きていて、戦争を見ている訳ではない。仏教で刹那滅というが、事件から事件へと、砂糖のように消える眼前の事実を見ているだけだ。

ほんとうをいうと、運命の髪か、藁か、それはどちらでもいい。子供の僕が病床でみたのは運命の顔ではない。死ぬかもしれない僕をみたのだ。そういう僕をみる僕の、眼が冷めたのだ。枯れ野を駆ける夢の芽は、その時に宿ったものだろうか。